



(第34号)

発行所 〒260-0853
千葉市中央区葛城1-5-2
県立千葉高等学校同窓会
印刷所 千葉市中央区末広2-1-16
電話 (268) 2355 (代)
株式会社 千葉躍進社

新年に思うこと



同窓会会長 霜 礼次郎

同窓の皆様、明けましておめでとうございます。健やかに、新しい年を迎えられた事とお慶び申し上げます。

昨年は、一二五周年の事業もほぼ終了し、寄付金と名簿作成費を合わせて、約一億円の事業でありました。多くの同窓の皆様のご理解を得て、目標を大きく上回った事は、会員の一人一人が、母校を思う心の結果の表われと、評価されて良いと思います。

最初の目的どおり、二十一世紀を背負う後輩が、逞しくそして恵まれた環境で、勉強が出来るように、寄付金を使用させて頂きました。

この一二五周年の事業の評価として考えてみますと、公立の高等学校において、同窓会が独自に、周年の記念事業を行ない得た事は、誠に珍しい事であり、我々同窓の誇りとする所でもあります。今後は、行政任せの学校経営だけでなく、同窓会は元より、民間の関与が必要となつて来るでしょう。

教育環境は、我々の母校が二五年の伝統の上に、ただ漫然と過しているだけでは、何時か衰退の道を歩む危険性が伴います。

改革は常に予知し、早め早めに対応して行かねばなりません。一二五周年記念事業が、そ

の改革の波として先取り出来た事は、誠にラッキーであったと考えるべきでしょう。重ねて厚くお礼申し上げます。

「再編の時」



校長 大野敬三

本年五月十九日県教育委員会は高校再編計画第二期プログラムを決定しました。これにより本校は中高一貫教育校として、平成二十年に二学級規模の中学校を併設することに、また定時制は同年に現生浜高校に設置される三部制定時制高校に移転することとなりました。

中高一貫教育校とは、今まで公立学校では実施できなかった中・高校期の六年間を一貫した教育過程や学習環境のもとで学ぶことができるようにするもので、平成十年学校教育法が一部改正され、平成十一年より設置できることとなったものです。この形態には、「一つの学校において一体的に中高一貫教育を

今後、同窓会組織が尚一層、充実・発展を期する事を期待して、ご挨拶といたします。

行う中等教育学校」、「高校入試を行わず、同一の設置者による中学校と高校を接続する併設型の中学校・高校」、「既存の市町村立中学校と都道府県立高校が教育課程の編成や教員・生徒間交流等の面で連携を深める形で進める連携型中学校・高校」の三通りがあります。

県の再編計画では、中等教育学校を二校程度、連携型一貫校を二校程度設置することとなっています。連携型については関連高校が地元三中学校との連携のもと本年からスタートしました。本校は中等教育ではなく併設型ですが、計画二校中の最初の学校となります。三部制定時制高校とは、午

前・午後・夜間の部と三部を設けた定時制高校です。県には十七の定時制高校がありますが、全てが夜間で、今日の多様な学びの形態に十分対応できる状況ではありません。そのような中、全国で近年、特に精力的にすすめられてきたのがこの三部制(二部制等多様化している)高校の設置です。夜間働いている人は昼間に、午前中用事のある人は午後等に、また、時間の余裕のある人は他部の授業も履修できる、そのような現在の生涯学習時代にピッタリと合った学校といえます。

県では、計画の中で三部制定時制は三校程度設置するとしており、平成十八年には現松戸南高校が、十九年には二校目として現生浜高校がスタートします。この生浜高校に平成二十年本校定時制生徒が転学することになる訳です。

本校の再編は全日制・定時制ともに新しい学校を創るということで、他の案とは多少異なっています。そこで県では、この準備については県立高校改革推進課が中心となって行うこととし、課長が室長となり、関係課、

本校教職員、それに併設型には中学校関係者、三部制には生浜高校教職員を加えた準備室を設け本年二学期より業務をスタートさせました。

内容的には、学校の基本目標方針から始まり具体的な方策まで、ソフトの面の検討から、施設、設備、人材まで全ての面を決めていくこととなります。中でも全日制においては、●本校の良さを生かす一貫教育校のあり方は、●校舎等施設設備の整備方策は、●優れた教員の確保は、等大きな課題であり、定時制においても同様ですが加えて、全日制の併設されることによる調整、同窓会の今後の方向等も重要な課題です。検討期間は、全日制は平成十八年度までの二年間、定時制は十七年度一年間であり意外と時間はありません。

の皆様の一層のご理解、ご支援をお願い申し上げます。

(追伸) 創立一二五周年事業では、当初計画事業に加え多くの追加事業を進めていただきました。心より厚く御礼申し上げます。

同窓生が集う場所を

百二十五周年記念事業実行委員会

事務局長 阿佐幸雄

(昭和三十五年卒)

百二十五周年記念事業には同窓各位の協力で初期の目的を達成致しました。詳細は記念事業報告に掲載されると思いますが、割愛させていただきますが、多くの方々の協力があつたからだと深く感謝しております。

さて、このたび同窓会事業の一端をお手伝いして感じたことを述べさせていただきます。

私は今回の記念事業に関わるまで同窓会事務局がどう運営されているのか知りませんでした。

記念事業事務局長を拝命し、はじめて同窓会の事務局は学

校の校務分掌とは全く別であり、母校に在籍する同窓の先生方がボランティアで事務局員をして頂き、千葉校同窓会は成り立っているということでした。

同窓生から住所異動の連絡があってもその情報は校内理事(最年長OB教職員)の方が保存されて、同窓会の経費の領収証も会計を担当するOB教職員のもので保存されているのです。

これからも同窓生は卒業し増え続けて行くと思いますが、その受け皿である同窓会の運営を学校としても考えていただかなければならないと思います。

同窓会がもっと活性化し、若い方々にも力を発揮していただきたいと多くの先輩が言われまますが、それにはもう少し母校へと足を向ける機会が欲しいと思います。

私たち同窓生が学校と疎遠になるのは、同窓生が集う同窓会館と言うような所が無いことが一因だと思えます。

しかし残念ながら、事務室は無論、事務機一つ無いのが現在の同窓会なのです。

美術館より

伊藤敏隆

(昭和二十二年卒)

昨年来、千葉高校創立百二十五周年記念事業の一環として、美術館の改修を行った学校長、同窓会長、並びに寄付して下さった同窓会員の皆様に厚く御礼申しあげます。

さて、これを記念に長年計画しておりました収蔵目録を作りました。未だ未だ卒業生の中には、画家・彫刻家・書家、その他活躍されておられる方も多いのですが、何しろ予算もなく、ご寄贈頂くばかりの美術館ですので、強いてお願いも出来ず、お申し出のあった作家だけしか載せられなかったにもかかわらず、こんなに集まったのはやはり伝統のお蔭でしょうか。

なお、この目録の内容は、カラー写真一三七点・白黒写真一三〇点の画集です。ご希望の方には、実費の半額でお分けいたしますので、左記に申し込んで下さい。

◇県立千葉高校

TEL〇四三(二二七)七四三四

(工芸科) 村石清人先生

学年短信

●昭和八年卒

安田 衛

昭和八年卒業の昭八会は毎年九月に梅松屋で開催していたが店主の内山忠雄君が昨年七月に永眠し、続いて本年より梅松屋は閉店することになったので他所で開催することとしていたが、常連の金子泰君が春に急逝し、また東京より参加してくれている吉野平八郎君の都合もあり、会は明年三月に行うこととなり、金子君の冥福を祈るとともに各人の近況を語り合うこととなった。



常連の遠藤健郎、大木亮喜、加地禮太、安田 衛、山口董平、吉野平八郎の六名は明年は満九十才を迎えるが皆元気にすごしており、明年の会合を楽しみにしている。

●昭和十一年卒

佐瀬喜一

昭和十一年三月、卒業生一七四名の集い、土葉会「は昭和二十二年第一回以来、毎年開催、昭和五十年から二年に一回となり、今年三十六回になる筈なのだが、齢八十六才ともなれば、他界した者も一一〇名をこえ、体調をくずしたり、病氣、入院している者もいて、出席者は漸減したため、やむなく、土葉会「は閉幕している。そして文通や電話等により、生き残った強者?同志連絡をとり合っている次第。年の瀬も近く、石出康、織戸利雄、西郡晟、三君のたてつづけての訃報に接し暗然となる。会長は長谷川泉君。幹事は新藤栄一、向井十郎の両君と筆者。

●昭和十二年卒

古川 芳

卒業後六十八年が経過、制服に制帽、ゲートルを巻いて、あの坂道を五年間通学。五年生の時には八日間に亘る銃を持って富士の裾野の演習。

又、運動部は野球部が甲子園出場は勿論、関東大会で優勝。他の運動部も各々に活躍(千葉高創立百年の記念誌に掲載されて居ります)。こんな思い出に浸る今日この頃になりました。

さて平成十五年の我々の同窓会で、元気な人も少なくなりこれで終りと思ったところ、まだ続ける様にと声が多く、では今年の秋に実施の準備と考えていたところ、私が八月二日に入院病床生活となり、残念ながら実施出来ず残念です。

(病床にて記す)

●昭和十三年卒

鈴木尚純

いざや会の総会は平成十六年十月七日、船橋市の稲荷屋にて、十二時より開催。出席者は九名。何れも健康そうで、特に井上君は船橋市の十料のマラソンの高齢者部門で一位となった元気さである。話題は多岐にわたったが、つらかったが楽しかった富士山麓に於ける演習(教練)旅行、山中湖の帝大寮瀧ヶ原の廠舎、箱根、甲府の温泉宿、富士

五湖めぐりなどの思い出に話がはずんだ。次は配属将校で古川少佐、土橋大尉、高橋中佐、佐藤大佐の四人で、皆は土橋大尉の「天皇陛下の命により配属将校を命ぜらる」との挨拶が印象に残ったらしいが小生は佐藤大佐が他の将校の様に、がなり立てることなく、訓す様な話し振りで「御勅諭は坊主がお経を読む様に丸暗記することにより、その精神をよく理解することが大切である」と云はれたことが今でも心に残っている。

●昭和十四年卒

水谷利夫

平成十六年三月三十一日解散した。

●昭和十五年卒

古川清房

本年度の葛城一五会は十月三十一日(日)正午より西千葉駅前みどりで開催。出席一八名。久しぶりの日本間で良い雰囲気となり、自然に五、六名ずつのグループに分かれ楽しく懇談、話はずみ、あつという間に二

時間が経過。ここで一応閉会し、この後、この店でコーヒーを出してくれるというので、希望者をきいたら一名となり、大広間の一隅に喫茶テーブルを置き、それを囲んで懇談継続、一時間後の午後三時漸く終了。誠に楽しい会であった。気楽で自由な雰囲気作りが肝要と痛感。

●昭和十七年卒

紅谷和助

十一月二十七日忘年会を兼ねた同窓会を千葉駅内ペリエホールで開催した。

出席者は二十三人で昨年より六人少なかったが、吾々の殆どが八十才を超えた今日では、已むお得不い現象かも知れない。席上、早山幹事から石川(民)、小川(良)両君逝去の報告があったので一同御冥福を祈ったが、特に石川君については医師として地域医療の向上に大きな貢献をしており、しかも誠実温厚な性格のため、誰にも好かれ

ていただけに哀惜の念一しおの思いがあつた。

会食中出席者一人一人から近況を報告してもらつたが、殆んどが在宅で悠々自適の生活を送っている中で未だ現役で活躍している人も幾人かいたが、石川(広)君などは今でも剣道師範として現役の青少年に稽古をつけていると聞き皆一驚した。

一年振りの再開であり、歓談尽きぬ中お互いに名残りを惜みつつ来年の再会を約して散会した。

●昭和二十年四卒

(禄寿会) 猪田昭三

我々六十回生は今年、卒業六十年を迎える。此の所、毎年総会を開き旧交を温めており昨年は六月十三日に、ほてい家に三十名が集まって和氣藹々の会であつた。顧みると大日本帝国(版図は本土の他、台湾、朝鮮、千島列島、樺太の南半分及び委任統治の南洋群島、租借地の遼東半島等)の時代に生まれ(昭和の子供)として満州事変、支那事変、ノモンハン事変、皇紀二千六百年(昭和十五年)(東

京オリンピック開催地辞退)式典(青少年学徒に賜りたる勅語)(欲しがりません勝つ迄は)で幼少年期を迎えた。昭和十六年四月、大東亜戦争突入(十二月八日)の四月に入学国民皆兵の為、陸軍の現役の配属将校がいて学校教練が毎週二回あつて三年生から三八式歩兵銃に短剣着装、射撃、銃剣術等を習い進学時の内申書に士官適、下士適、兵適、の項目があつた。一年生二年生から陸軍幼年学校、三年生から海軍甲種飛行予科練習生(七つ釘)四年生から陸軍士官学校予科、海軍兵学校、高等商船学校等軍隊それに準ずる学校の受験があつた。

三年生の時に戦時特令で(学徒勤労動員令)により陸海軍の施設への使役、更にエスカレーターとして四年生の時に一学期で授業中止して八月一日より通年の動員、遂に二十年三月三十一日に四年で(六十回生)で繰上げて五年生(五十九回生)と一緒に卒業。その年の八月原爆投下、敗戦。国内向けには終戦で進駐軍であるが明らかにオキユパイド・ジャパンに転落。陸海軍及びそれに準ずる学校在学者は一

般への編入試験或は翌年再受験で苦勞した。

焼土からの復興、高度成長、定年、その後バブルが弾け、喜寿を迎え物故も故障者も多い。

今年六月十二日、日曜日に、ほてい家で会の還暦と会員の喜寿（満とかぞえ）の祝いを兼ねた集いを開き今後の運営案を持寄る予定。以上

●昭和二十年五卒

勝田和夫

台風、地震…。天変地異がやけに続いたような平成十六年。しかし、わが同期（新葉会）には幸いなことに会員の訃報を聞くことがなかった。前年の十月、喜寿記念総会を開いてから一年余、音信不通者は別としても、まずは平穩。この分ではまた元気で再会を期待出来そうである。

さて、平成十七年はわれわれにとって卒業滿六十年のフシ目に当たる。クラスの大方は昭和の初めに生まれ、紀元（皇紀）二千六百年入学、終戦の年に卒業。振り返ると感慨は深い。その往事についての一駒。同

期の中では今もって、卒業式が無かった、いや有った、と議論が出る。正しくは、少人数出席の下に行われたのである。ただ、それを知らない者が多い。

在学末の勤勞動員の連続と上級学校進学など、つなぎ目の事務・手配がチグハグになったうえ、交通、通信が麻痺しだしたためである。この「学年短信」にも昭和二十年卒だけが四卒、五卒と二つある。相次ぐ学年が同じ年に前後して卒業したのでこうなった。これも当時の学制混乱のせいである。

●昭和二十二年卒

齋藤喜久三

「同期会はかくあるべし」

恒例六月第一土曜日は「ほてい家」で開催、本年より喜寿も間近かとあつて流石の元氣印も夜の外出を危ぶむ家族の希望で正午開会とした。これがなんと大外れで六月の長い午後に結局夕暮れ迄の盛会となり、メートルが上がれば薄暮も何のそのと皆元氣を取り戻した様です。就中卒業以来五十七年振りに参加の川島雄次君との再会は写真の

通り劇的でした。一目で中学生同志に戻ってしまい抱きつき者、握手をする者、肩をたたき



(同期会、劇的な再会)

合う者、オス！これこそ同期会の何にも代え難い雰囲気です。永年出席しなくて参加しづらい後輩諸君、決して氣後れせず安心して出席して下さい。千葉高同窓会はすべてこの通りです。戦後初代野球部主将田中一熙君逝く。

昭和二十一年いち早く母校野球部を立ち上げ県大会は十八チームの出場で現在では想像もつかないが乏しい資材の中、故早崎先生野球部長の片腕としてやがては数年後の後輩達が二回の甲子園出場の際を作った事は特筆すべきであった。同期の中江君が朝日の社長に平成元年になってから毎年小生と二人で甲子園に招待されて、来年こそは母校を連れて来るの意気込みで後輩の指導を続けた。六月に大動脈解離で他界した事は同期生一同元氣印の源を亡くした様で誠に残念。

同君の冥福を祈ります。

●昭和二十四年卒

(葛城芙美葉会) 安田敬一

今年は記録的な猛暑、十回の台風上陸、新潟県中越地震と

天変地異の一年でした。幸いに前半の春のうらかな佳き日、みどりの日に恒例の同期会が盛大に開催することができました。

恩師安西、早川、篠崎三先生をお迎えし、会場「プラザ菜の花」は七十名の同期生でいっぱいとなり和やかな空気につつまれ楽しく有意義な一日でした。

毛利秀雄君、奥中惇夫君の二人がきて、岩波新書、筑摩書房より名簿を出版。同期の活躍ぶりを伝える司会の池田博君も嬉しそうでした。

葛城美美葉会は二三四の言葉通り、千葉中二三年組、千葉高二四年組が共に相揃い、母校のなつかしい新旧共通の思い出を語る事ができる貴重な同期会。

今年から代表幹事を関根義昭君より大役を引き継ぐこととなり更に会の発展に努力したいと思っています。

幹事長の渡部正男君はじめ池田、接待、高澤、越川、森、植草各幹事諸兄とともに次年度も同じ会場、同じ四月二十九日の佳き日、同期生各位の御出席をお待ちしています。

●昭和二十五年卒

矢島 肇

イラクに平和はいつ訪れるのか、テロは相変わらず暗躍、国内にあっても暗いニュースの多いこと。苦しかったあの戦中戦後も、今や青春を語るには欠かせぬ懐しいものになった。そんな思い出に耽りながらの平和な一日だった。オリンピックの今年恒例の同期会を四月二十九日に行った。奇しくも一年先輩と会場を同じくした為、お招きした安西、早川両先生にはとんだご足労をおかけしてしまっただ。古稀過ぎた仲間七十五名の出席(二十五%)、欠席、行方不明、無回答で一五四名(五十二%)、そして既に他界された友六十二名(二十一%)が現況であった。今回は北京オリンピックの年、全員喜寿を迎えての会となる。元気で再会を約束しあった。

●昭和二十六年卒

久山 敬

六月二十日(日)十二時から十四時、ホテルサンガーデン千葉にて同期会を開催した。参加

者六十九名、益々若々しい早川、篠崎両先生にも御出席いただき、記念撮影の後、永野剛君の司会で開宴となった。まず、この二年間に他界された会員に対し、黙祷を捧げた後、幹事挨拶、早川先生の御挨拶に続き、篠崎先生の御発声で乾杯、久し振りに顔を見せた会員も混じえ、あちこちで交歓の輪ができていた。特別の出し物として、久木元健二君が代表するマジックグループによるマジックショーに、華やかなフラメンコダンスグループの舞踊も加わり、賑やかに会を盛り上げることができた。

会の終りに、中村雪光君のアカデオン伴奏、畑昭次君の音頭で、校歌、戦歌Iを斉唱し、会を閉じた。

●昭和二十七年卒(二七会)

中村作二

我々二七会は、昨年春で全員七十歳を迎えました。そこで古稀の集いをやろうということので、六月五日(土)にプラザ菜の花の三階で開催しました。当日は早川俊一先生、篠崎兵

衛先生、稲葉正先生のご出席をいただき、百名を超える全員が集まって楽しい歓談の時を過ごしました。

なお二年前に卒業五十周年記念事業として母校の玄関に種谷扇舟先生書「感謝之一生」の額を寄贈させていただきました。が、先生が昨秋逝去されましたのでご冥福を祈念する次第です。

●昭和二十九年卒(福の会)

田積 晃

昨年三月に卒業五十周年を迎え、記念すべき福の会総会は、六月二十六日ホテルサンガーデン千葉で開催。稲葉先生、南波先生、早川先生、のご出席をいただき、七十九名が集い、ほぼ例年どうり多数の参加で、歓談を主とした集まりは和やかで賑やかなものであった。

記念行事として卒業アルバムを発行する事を決め、有志十六名が作業に当たり、五ヶ月を要して完成、総会にて頒布。

呼び掛けに応じ、四十名を超える会員から二百枚を超える懐かしい高校時代の写真が寄せら



れ、青春譜としてのアルバムページに加え、安西先生の版画、現在の学校、級友の今の姿、同期会、旅行なども紹介し、実のあるアルバムを発行することができ、よき思い出を残すことができました。

記念修学旅行。温泉とグルメと観光『ゆつたりしたバスの旅』を合言葉に、九月五日、一泊二日の旅に出る、十七名が参加し数年振りの旅行となった。サロンのバスでの小宴会に始まり和気あいあいと、八幡太郎義家ゆかりの、名湯、福島県石川郡の母畑温泉へと向かう。途中、前々日からの大雨で増水、瀑布の如く様相を変えた袋田の滝、雨も上がり静かな山本不動尊を散策。

翌日、日本最古の回遊式庭園として知られる、白河南湖公園を散策、小名浜に立ち寄り買物日立市に入り、吉田正音楽記念館を見学。バスでの小宴会で記念旅行の幕を閉じる。

九月二十六日、砂つ払いの会十名が集まり、旅行の無事を祝う。

ゴルフは参加者が少なく昨年は全て中止となる。

忘年会は十二月十九日、東京在住組が世話人となり、昨年同様、品川のホテルパシフィック東京でおこなわれ、早川先生のご出席もいただき、三十三名が集まる。

今年は、皆、古稀を迎える年一年間の健康を祈念して、この一年を締めくくる。

福の会会員の皆様、今年も老いを撥ね除けいろいろな催しに数多く参加され、元気のもと、福の会と共に元氣にお過ごしください。

●昭和三十年卒

中基正明

隔年に開催している三十年会、平成十六年は開催年に当たり、定例の六月第一土曜日、馴染みの「ほてい家」にて、老先生南波、早川、青野の御三名の臨席を得、生徒六十四名総勢六十七名にて、盛大にとり行ないました。その席上、図らずも今回が卒後四十九回と云う事で、このまま推移すると次回開催が、平成十八年となり卒後五十年一年になってしまうので、卒後半世紀を期して集まるうではな

いかと、世話人代表宍倉正胤君から提案が有り一同文句なしの大賛成、平成十七年六月には盛大にやろうと約す。その際、記憶にとどめる写真集でも出したらとの話が有りましたが、二十九年卒の先輩方が、十六年が卒後五十周年記念と云う事で頗る立派な写真集を出されているのを拝見、従って我々二番煎じになるのではと臆しているのが実情。それはともかく何とか催す予定としております。尚、30会と称するゴルフ会も定例の春秋年二回開催、この秋が第五十四回と云う事でやっておりますが、寄る年波、精々六組が手一杯となりつつあり、これも詮方ない事と認識しております。いづれにしろ、平成十七年には皆元気に達者で卒後五十周年を迎えるつもりでおります。

●昭和三十四年卒

中村好成

34会恒例のゴルフ大会を十月十四日、恩師早川先生にご参加を頂き、開催しました。

毎度のことながら、牛島君にコース手配、椿、古幡両君に万

年幹事をお願いし、あのブリジストンオープンの一週間前に、袖ヶ浦コースで二十四人が参加し、プロの様な気分分、好天の一日、楽しくプレーさせて頂きました。優勝は、女子プロの千野葉子さんでした。

今回は、十七年五月十九日新袖コースで開催予定。

なお、平成十七年は、同期の鶴岡啓一市長の、選挙の年でもあります。

●昭和三十五年卒(珊瑚会)

中村重春

珊瑚会の中に探美会というグループが出来て毎月のように活動しています。面白そうな企画を立ててはEメールで呼びかけ行きたい人だけ参加するというバーチャル集団で、登録メンバーは五十人近くに増えました。

開催は二年間で二十回を越えました。実はスタート時は美術館めぐりの会でした。なのにたちまち「美術館なんてつまらない」という外野の声に押されて「美酒も美食も美のうち」とこじつけたのが迷走のもと。

今では展覧会にも行きますが

横浜・鎌倉・葛飾の散策とか、季節の花を求めて丹沢・伊豆へ出かけるとか、きのこ狩りなど自然志向が定着してきました。それでも時折は雅楽やら僧侶の合唱を鑑賞するなど、多彩な企画で長く続きそうな様子です。

●昭和三十六年卒

田那村 宏

平成は十七年目。高校生の多くが平成生まれとなる時代です。超スピードで社会の変化が起る中で、創立一二五周年記念事業も順調であり、後輩の学生が輝ける未来を築くことを祈ります。

創立一二五周年を機会に同期が再結集いたしました。継続に向けて昨年も幹事会・三六ゴルフ会などを開催。平成十六年十一月二十日、秋の同窓会総会(京成ホテルミラマール)には、六八名が集い卒業以来の旧友とも親交を温め、更に藍綬褒章を同期の立崎隆氏が受賞されましたので祝賀会ともなり盛会であった。還暦を過ぎ慶賀もありました。が、三名の計報もありました。慶弔の年代に仲間入りした事を

実感いたします。次は六五歳の頃に楽しい企画を予定しています。

●昭和三十七年卒

駒井隆子
朝生邦夫

◎去年二月一四日のバレンタインデーには、私ども還暦を迎えた三七会の主催で「千葉高同窓会総会」が幕張プリンスホテルで開かれ、五四〇名(内三七会一五〇名)を超える参加者で盛況でした。同窓のみならずご協力に感謝いたします。

◎母校をめぐる情報もいろいろと聞こえてまいります。定時制廃止、中高一貫高化の政策については、去年の同窓会でも話題になりましたが、時流に流された拙速を避けて、千葉高定時制の勤労青少年の学習権を保障する伝統を損なわず、また全日制の自由で平和な世界人としての「普通教育」をめざす校是を守って頂きたいと心から思います。

◎ところで、今年も三七会の活動は、多方面に活発に展開されました。

「三七で歩く会」は、北ア黒部五郎岳縦走、久住・大船山登山などをはじめ、ほぼ毎月一回の山歩きを楽しんでいます。

「三七ゴルフ会」は春と秋のコンペ中心に多数の参加を得ています。「三七旅行の会」は、夏に南北北海道へ三泊四日の「熟年修学旅行」に行きました。

この他、冬には「三七スキークラブ合宿」を、夏には「三七海の会」を開催して、旧交を温め懇親を深めています。

サークル活動では、「三七卓球の会」と「三七囲碁の会」とが、月に一〜二回コミュニティセンターや会員宅で体を動かして、頭を鍛えています。「三七釣友会」は海釣りを楽しみ、「三七ヨットの会」「三七カヌーの会」は、航行を楽しみました。

今年度新たに「三七映画を観る会」が発足し、名画を何回か鑑賞し、懇話しました。

お互いの連絡は、池田YICが管理する千葉高三七会HPや各サークルのMLを通じてネットを構築しています。二〇〇四年忘年会で今年の活動のまとめをしました。二月には、「三七会年報」が発行される予定です。

◎三七会ホームページおよび連絡先一覧は左記の通り。
HP
www.chibakou.vic.or.jp/37doukikai
(以上の照会は ikeda@vic.or.jp)

●昭和四十二年卒

中山泰正

「愛称を募ります」

私達昭和四十二年卒の特色について話したいと思います。

昭和二十三年から二十四年にかけてこの世に生を受けました。両親は戦後のドサクサに一緒にあった者が多く、長男・長女の率が高いのです。人名漢字に制限が多く、例えば「彦」が使用できず「比古」と表したのもこの年代です。団魂の世代と呼ばれ、特に千葉高に入学した同胞は競争意識が強く、弱音をはかず、非常にバイタリテイに富んでいます。ただし何故か不思議な事に自己顕示欲は強くはなく、政治家を志す者は稀有です。ライバルの足を引っ張るよりは見習い、認めようとしています。敵というより分身といえるでしょう。私自身、彼等・彼女等との邂逅を幸福に、また誇りに思

います。

こんな私達昭和四十二年卒にどうか、すばらしい愛称を!!

●昭和五十年卒

園部 創

冬ソナを契機に韓流ブームに踊る我が年代の主婦達によれば、ヨン様とジウ姫、否チュンサンとユジンの出逢いの場となった春川(チュンチョン)高校こそが共感を呼ぶ純愛のストーリーだと言う。

確かに千葉高校では自由な校風の中でのびのびと青春を送り、韓ドラならぬ思春期ならではの純粋な恋愛があった。だからこそ同窓会で懐かしの人に逢えるのが楽しい。

我が学年は一回目の同窓会を平成二年に京成ホテルで、二回目は平成十四年十月にホテルサンガーデンで先輩・後輩との合同開催の型式で実施した。次回はその五年後となる平成十九年秋に開催することが決まっています。

いよいよ同窓会エイジになりつつある我々としては、還暦幹事学年となった時には諸先輩に

負けないように百五十人以上の同期が集まることを目標に、ミ二同窓会を開催して徐々に盛り上げていきたいと考えている。

●昭和六十一年卒

増田 淳

二年前の春、卒業以来、初めて一堂に会する場を設けた。参加者百四十名、恩師や旧友と、当時の懐かしい話に華が咲いた。卒業後、音信不通だったのに、ひょっこりと会場に姿を現した者もあり、改めて宿縁を体感した次第である。

さて、われわれも三十代後半にさしかかり、社会人として最も脂が乗り切った時期である。また家庭では、子育てや教育に没頭し、一時も神経の休まる暇が無い。高齢の両親を抱え、介護や年金の問題も真剣に考えなければならぬ世代である。

邂逅の妙が演出した華やきのオアシス。そして、旧交を温めた後の淡々とした別れ。参加者一同、次の再開を堅く信じつつ、繁忙な生活に勤しむ今日この頃である。

支部だより

☆東京葛城会

東京葛城会副会長 近藤喜久夫

(昭和三十五年卒)

第四十五回東京葛城会は、昭和四十五年卒の佐藤孝史幹事の司会により平成十六年十月二十一日上野精養軒で、百四十名の同窓生が集い盛大に行われました。開会の辞の後、物故された同窓への黙禱、会長挨拶、事務局長の会情報報告があり、次いで来賓としてお招きした霜禮次郎同窓会長の挨拶、大野敬三校長先生の進学状況を含めた学校概況説明がありました。恩師は、今回は依田寛市先生にご出席頂きました。

鈴木定雄先輩の音頭で乾杯をし懇談に入りましたが、近況報告、情報交換、四方山話などに花が咲きました。

余興として、毎年異なるのですが、今年も千葉高同窓生で、慶応義塾大学奇術愛好会の皆さんに出演頂き好評を博しました。

ファイナーレは、恒例の校歌斉

唱です。旧制中学校時代のものと、新制高等学校のもの順番に歌いました。指揮は、旧制側から斎藤喜久三先輩が、新制側からは宮崎勝弘先輩がとられ、斎藤先輩の吹くラッパの音に乗って声を限りに歌いました。同窓生が心を一つにしたひとときでした。

最後に来年度の総会を担当する昭和四十六年卒の小島晶幹事から、閉会の辞が述べられました。

この総会に至るまでの中間では、中村浩紹会長(昭和二十九年卒)のもと、箕輪正美事務局長(昭和四十四年卒)の司会により、観桜会、準備会、忘年会(次年度計画)と三回の幹事会が開かれます。

最近の幹事会での話題は、若い世代の同窓会への積極的参加を望む声が強くなっています。二、三名の友人を誘い、一度総会に出れば、また次回も来ようという気持ちになれるのにと話し合っています。口コミを通じてながら、会勢の伸展に努力しているところですよ。

(波紋)

個人的なことですが、高校に

入学して最初の書道の時間でのこと、種谷扇舟先生のご指導で、中国の古典を臨書するものでした。

私は、唐・太宗皇帝の「温泉の銘」を選びましたが、それがきっかけで、中国への関心を持つようになりました。

中国の文物にふれながら、後年、地元の日中友好協会に入会し、やがて実際に中国を訪問するようになり、既に三十回位になります。



西安の華清池では、「温泉の銘」の石碑を見て感動しました。その後、南行徳駅前ビルを建

て、名称は「弘文館」としました。太宗皇帝が政府高官の子弟の教育の場として建てた「弘文館」に因んだものです。

七年前に、「三国志の旅」を企画し、高校時代の三人の同級生女史にも同行してもらい、諸葛孔明終焉の地、五丈原まで行きました。後で同級生の男性諸氏から婉曲的な羨望の声が耳に入ったのは言うまでもありません。

平成十四年二月の同窓会総会で、中国を代表するオペラ歌手、崔岩光さんに美しいコロラトゥーラ・ソプラノを披露してもらいましたが、彼女を知ったのも、そんな活動の中からです。

高校時代の書道の時間に出会った太宗皇帝の書でしたが、書の世界への発展はなく、その波紋は、中国文化へ波及し、いまなお広がりがつあります。現在、地元のタウン紙に、中国旅行記をシリーズで執筆しています。



☆長生茂原葛城会

支部長 常泉吉朗
(昭和二十六年卒)

当支部は毎年十月支部総会を開いております。御存知のように当地区は長い間学区制の区域外で、千葉高を受験することも難しい状態でした。その中で支部が四九回を重ねてきました。毎年の参加者も二十名前後ですが、旧制高校の同窓会のような絶滅状態というわけでなく、半世紀を過ぎようとしています。母校の歴史の半分にもなりません。支えてきたものと思います。十六年十月四九回支部総会を開き母校から前回に続き菅井先生に出席して頂きました。参加者十八名で昭和十一年卒から昭和四十年卒でした。平成卒の同窓生が参加するのはいつ頃になるのか楽しみにしております。



☆船橋葛城会

会長 吉岡賢一
(昭和三十五年卒)

千葉高は一昨年、創立一二五周年を迎えましたが、我が船橋葛城会も本年度で設立二七周年となります。子供で言えば立派に成人した年齢。そう考えれば、たかが二七年も、されど、となります。当会設立に奔走された初代会長の御息が今や中年となり、親子二代の千葉高卒として会の運営に意欲的に参加されている事も、時間の流れを感じるものです。ところで、母校の二二五周年記念事業には当会のスタッフが大いに活躍しました。寄贈されたトレーニングセンター並びに建立校歌碑のデザインと設計。彫り込む歌詞の書架への依頼。裏面に取り付けた楽譜の精査。特に校歌碑は末永く残る記念碑でもあり、歌詞は正確なものでなければなりません。

従ってその原典の調査は大変気苦労の多いもので、多大な熱意と時間が注がれました。多くの皆様の御協力により一二五周年事業は立派に完遂しました。

た。我が国近代化の黎明期、明治十一年に早々と創立された母校の歴史は輝かしいものがあります。我々の会も、ささやかながら歴史の蓄積と継続に努めたいものと願っております。

☆東金葛城会

支部幹事 岸本雅邦
(昭和三十九年卒)

東金葛城会より今年悲しいお知らせをしなければなりません。昭和五十八年に会を設立し初代会長となりました昭和二年卒の上田鉄雄様、又第四代会長昭和十五年卒の石野仁様の訃報です。上田鉄雄様は毎年同窓会が開催される二月の第一土曜日を大変楽しみにしておられ、私が運転手をして二人で参加したものでした。参加者の中で御自分が最高齢である事が自慢であったようです。

石野仁様はゴルフを殊の外愛され、地元のゴルフクラブの役員を務めておられました。そのゴルフクラブでプレーをし、スコアを報告した直後に苦し

まずに天国に召されました。両先輩のご冥福をお祈りするとともに先輩の築いてくれた東金葛城会を益々発展させるように心に誓いました。

☆佐倉葛城会

片岡 寛
(昭和三十五年卒)

平成十六年度の佐倉葛城会は平成十六年三月十四日(日)佐倉市田町「菖蒲荘」にて、千葉高等学校長大野敬三先生のご臨席を賜り、四十名の会員の出席で盛大に開催することが出来ました。

会は正午より開催、大野校長の祝辞をスタートに、会員各位から楽しい話が続ぎ、大変懇談の輪が広がりました。

佐倉葛城会は夏に恒例となっていた佐倉国際花火大会に協賛し、「国際花火を見る会」として会員約二十名程が棧敷席で美しい外国花火と日本の花火を楽しみました。十七年度も更に会としての活動を活発に行っていく所存です。

葛城だより

◎平成十六年度受章者

藍綬褒章

鈴木国夫 (昭和32年卒)

湯浅太郎 (昭和32年卒)

立崎 隆 (昭和36年卒)

従五位

菅澤重矩 (昭和19年卒)

49回千葉市社会教育功労賞

加納正俊 (昭和37年卒)

◎逝去者

理事会役員

菅澤重矩 (昭和19年卒)

16・5・17

上田哲雄 (昭和2年卒)

16・9・6

恩師

竹内たき

(昭和20年、昭和41年 養護)

16・10・7

種谷久太郎 (扇舟)

(昭和27年、昭和44年 書道)

16・12・2

(敬称略)



在校生の活躍

文学部員三名が「第十九回国
国高等学校文芸コンクール」で
入賞しました。詩部門優秀賞、
鷺見佳絵さん(三年)、長尾庸
子さん(二年)、小説部門優良
賞、松本大輝君(三年)です。
ここに鷺見さんの作品をご紹介します。

「嘲笑」

鷺見佳絵

虫たちが笑っている

あいつらは

二本の脚のあいつらは

俺らを殺したあいつらは

この世で一番非常識

あいつらは

じぶんたちの食料を

きれいにすると言い張って

毒を振りまき俺らを殺す

そうやって

俺らの食った跡のない

その不自然な食料を

うまい うまいと言ってるよ

俺らがまずくて食わないものを

うまい うまいと言ってるよ

森の木々が笑っている

あいつらは

大きな脳もつあいつらは

俺らを見下すあいつらは

此の世で一番大馬鹿者

あいつらは

俺らの住処に入り込み

住みよい住処を作ると言って

ばさばさばさと俺らを倒す

その上に

石のジャングルおつ建てて

熱い熱いと言ってるよ

汚い空気をもろに吸い込み

ごほごほ言いつつ歩いていくよ

動物たちは笑っている

あいつらは

王様気取りのあいつらは

うぬばれ屋さんのあいつらは

この世で一番愚か者

あいつらは

俺らを殺して金を得て

それを使って動物保護だ

そんな寝言を言っている

一方で

象牙鱗皮蛇の皮

高級毛皮エトセトラ

俺らの命で身を飾る

自分の言っていることを

すっかりさっぱり忘れてる

みんな人間を笑っている

一番賢いあいつらは

一番愚かなあいつらは

俺らの母は怒っているよ

ほらもうあんなに真っ赤になって

汗をだらだら流しているよ

俺らはみんな知ってるよ

若い俺らの弟妹たちよ

もういい加減

気付いてくれよ。

編集後記

お忙しい中、多くの原稿を
ありがとうございました。今回は
在校生の活躍を紹介するペー
ジを設けましたが、いかがでし
ょうか。同窓会員の皆様の暖かい
応援のもと、在校生のますます
の活躍が期待されます。

(五木田)

